

## 相互行動心理学と行動分析における文脈的視座 ：行動療法発展への示唆

園山 繁樹\*・小林 重雄\*\*

行動療法の発展への示唆を得るために、カンターの相互行動心理学とスキナーの行動分析の基本概念を検討した。その結果、両者ともに行動を文脈的 contextual に理解するという考え方が含まれていることが明らかになった。行動療法発展への示唆としては、1) 文脈要因の操作を検討する、2) 般化については状況要因を考慮する、3) クライエントの生活場面の随伴性と文脈要因の変容を検討する、4) クライエントの反応と刺激の機能関係を強めることを検討することが指摘された。

キー・ワード：相互行動心理学 行動分析 文脈要因 行動療法

### I. はじめに

心身障害を持つ人々への心理的・教育的・福祉的なアプローチに、B. F. Skinner (1904-1990) が創始した行動分析が多大な貢献を果たしたことは論を待たない。一方、従来の行動分析的アプローチの実践の上に、J. R. Kantor (1888-1984) が創始した同じく行動主義の立場に立つ相互行動心理学の視点からの検討を加えて、そのアプローチに新機軸を発展させていく試みが始められている (Ruben and Delprato, 1987<sup>34)</sup>)。その新たな発展の現れとして、園山 (1992b<sup>47)</sup>) は次の3点を指摘した。第一に障害観の革新である。従来、精神遅滞は脳の器質的・機能的障害の症状であるとか、学習能力の欠陥によるものというように表現されてきたが、相互行動論の枠組みに従って、遅滞した行動は単に個人の生理・医学的な要因から生じるだけでなく、環境的な社会文化的な要因との相互作用の中で生じていると考えられるようになった (Bijou and Dunitz-Johnson, 1981<sup>3)</sup>)。この立場から、障害を持つ人と物理的及び人的環境との相互作用の

中で障害を捉えるという新しい方向性もたらされ、生理・医学的な要因やその人の持つ能力という側面だけではなく、福祉・教育制度や居住環境を含めた社会文化的な要因へのアプローチが始められるようになった (望月, 1988<sup>22)</sup>)。第二に行動療法の枠組みの拡張がある。特に相互行動心理学の状況要因 (setting factors) の概念を導入することによって、ある行動の先行刺激や後続刺激だけではなく、その状況に存在する様々な要因が行動の生起に影響を及ぼしていることが認識されるようになった (Bijou and Baer, 1978<sup>2)</sup>; Steinman, 1977<sup>51)</sup>; Twardosz, 1985<sup>52)</sup>; Wahler and Fox, 1981<sup>53)</sup>)。すなわち、従来の三項に状況要因を加えた四項随伴性を枠組みとし、行動の変容のために状況要因を操作することが考えられるようになった (Brown, Bryson-Brockman and Fox, 1986<sup>4)</sup>; Chandler, Fowler and Lubeck, 1992<sup>5)</sup>; Wahler and Graves, 1983<sup>54)</sup>)。また、相互行動心理学の諸概念を導入することによって、従来看過されていた要因を明確化し技法の有効性を高めようとする試みがされている (園山, 1992a<sup>46)</sup>)。第三にエコロジカル・アプローチへの発展である (Schroeder, 1990<sup>38)</sup>)。相互行動心理学は一つ

\*中国短期大学幼児教育科

\*\*心身障害学系

の刺激や反応ではなくそれらが生起する場全体を分析範囲にしており、障害を持つ人の生活の場全体への介入を検討するエコロジカルなアプローチへの展開は当然の帰着であるといえる。

行動分析的アプローチに相互行動的視座が加わることによってこのような新機軸が始まっているとはいっても、現状では行動分析についての理解が十分されていることは言い難い面もある。例えば、単純なS-R心理学という理解から、刺激—反応—強化という図式に基づいた行動変容法という理解、あるいは徹底的行動主義という科学哲学としての理解など様々なレベルで理解されており、必ずしもその全体的理解がされていないことも多い。また、Hayes (1978<sup>91</sup>) は行動分析の4つのレベルのうち、臨床家は「技法」と「方法論」のレベルは熟知しているが「概念」や「哲学」のレベルについては知ろうとしていないことを指摘し、Michael (1980<sup>20</sup>) や Malagodi (1976<sup>10</sup>) は臨床的な行動分析と基礎的な行動分析が乖離し両分野の発展が妨げられていると主張している。

一方、Kantorの相互行動心理学についても、米国では1980年代より再評価が行われ実践への適用も端緒についたとはいうものの、米国でもわが国でもほとんど知られていないのが現状である。例えば、Morris, Higgins and Bickel (1983<sup>29</sup>) が行動分析3誌 (JEAB, JABA, Behaviorism) の歴代の編集委員に実施したアンケートでも、相互行動心理学について読んだことのある者は18%、影響を受けた者は10%に過ぎなかった。Kantorが創刊したThe Psychological Record誌においてさえ、第1巻(1937)から第33巻(1983)までの全掲載論文1,569のうち相互行動論に関係する論文は約10%の157にしか過ぎず、内訳は理論に関する論文のうち約30%、実験に関する論文のうち約3%に過ぎなかった (Ruben, 1984<sup>33</sup>)。Lichtenstein (1984<sup>15</sup>) が指摘するように、Kantorの文体は難解であり、彼自身は理論的研究のみに携わり実験的及び臨床的研究が行われず、共同研究もほとんどなかったことから、相互行動心理学は

ほとんど知られておらず、臨床への有用性も認識されていない状況である。

このような状況の中で心身障害を持つ人々への行動論的なアプローチを止揚していくためには、両者の貢献可能性をその基本的概念の検討を通して探っていくことが必要であると考え

## II. 相互行動心理学と行動分析の相違点と共通点

Kantorの相互行動心理学とSkinnerの行動分析の全体的な相違点と共通点については、すでにいくつかの検討がされている。例えば、両者の違いの一側面として、科学哲学的な記述を展開したKantorを「思索家」と呼び、実験結果に基づいて自論を展開したSkinnerを「実行家」と呼んでいる (Marr, 1984<sup>17</sup>)。Parrott (1983<sup>30</sup>) は両者は基本的に異なり、Kantorは刺激機能—反応機能をひとまとまりに分析の単位として機能的で記述的な分析を行っており、Skinnerは反応からなる単位を取り出し先行及び後続の刺激を操作し因果的で説明的な分析を行っていることを指摘し、この違いは基本的な違いであって、このことを無視して両者を調和させることは不可能であると主張している。Kantor (1970<sup>12</sup>) 自身も実験的行動分析を批評し、心理学におけるアニミスティックな説明を払拭するのに実験的行動分析が果たした役割を評価しながらも、①実験の対象を動物だけではなく人間の知覚や記憶、感情などにも広げる、②分析においては変数を任意にコントロールされた状況のものに限らずもっと広い心理学的現象に拡大する、③生活体の行為を極めて限定して分析の対象とするのではなく行動の場全体を説明するような分析をする、といった変更が必要であると提言している。

他方で、両者には共通点も多いことが指摘されている。最も基本的な共通点は、反精神主義、自然主義、客観主義 (仮設構成体や媒介変数、生理学的説明を認めない) である (Kantor, 1978<sup>13</sup>; Skinner, 1950<sup>41</sup>; Ribes, 1984<sup>32</sup>)。ま

た、Morris (1982<sup>23</sup>), 1984<sup>24</sup>), 1988<sup>25</sup>) は両者が基本的にコンテクスチュアルな世界観を共有しており、相互行動心理学のメタ理論的な強さと行動分析の実証的な強さを統合していくべきであると考えている。そして、相互行動の場を分析単位とした方がより科学的な前進が期待できると主張している (Midgley and Morris, 1988<sup>19</sup>)。

以下では、Morris が指摘した文脈 (context) の視点から両者の近似する基本概念を検討し、その意味するところを明らかにするとともに、両者を止揚する方向性を考察する。

### III. 分析枠：「相互行動の場」と「三項随伴性」

行動を分析するための枠組みとして Kantor は「相互行動の場」を、Skinner は「三項随伴性」を考案した。これらの枠組みを理解するためには、両者のパラダイムを図示するとわかりやすい。

相互行動心理学では Fig. 1(a) に示した相互行動の場 (interbehavioral field) を考える。その構成要素の主なものは次の通りである (園山, 1993<sup>48</sup>参照)。反応機能 (RF: response function) = 生活体が行う反応の機能、刺激機能 (SF: stimulus function) = 刺激物の機能、相互行動の歴史 (ih: interbehavioral history) = 生活体と刺激物との相互作用の歴史、状況要因 (setting factor) = 特定の相互行動の生起に直

接影響を及ぼす状況的な要因、接触媒体 (med: medium of contact) = 生活体と刺激物の接触を可能にする条件。この枠組みから相互行動心理学の特徴として以下のことを指摘できる (園山, 1992b<sup>47</sup>)。第一に行動とそれが生起する場を全体的なまとまりとして分析する。行動は単に刺激によって生起するものではなく、その場には生起に関連する様々な要因、例えば生活体の要因、環境的要因、時間的要因等が関与すると考える。すなわち、直線的な因果関係ではなく場を構成する要因を記述するものである。第二に時間軸上で行動の生起を捉える。ある瞬間の行動生起だけでなく、先行する単位相互行動の影響や後続する単位相互行動の影響も分析に加える。第三に刺激機能と反応機能を相互規定的なものとして捉える。単一の刺激機能や単一の反応機能はなく、互いにひとまとまりとして生起すると考える。

一方、Skinner の行動分析の枠組みは、一般に Fig. 1(b) のように表される三項随伴性 (three-term contingencies) であり、強化随伴性とも呼ばれる。弁別刺激  $S^D$  はあるオペラント  $R^O$  に先行し、強化刺激  $S^R$  が当該オペラントに後続する。しかし、この表示の仕方では行動分析の枠組みとして不十分である。なぜなら、 $S^D$  はある刺激が弁別操作を経た後に初めて  $S^D$  となるのであり、最初から  $S^D$  が存在するとは限らない。また、あるオペラントに後続するのは強化刺激に限らず罰刺激の場合もあり、消去操作の時には強化刺激は後続しないのである。従って、行動を分析する際や行動変容を意図するときは、Fig.1(b) より時間的に先行した状態を示している Fig.1(b') の図式が必要である (左の S は先行刺激、右の S は後続刺激)。このような図式は、行動療法の最新テキストでも行動の原則として用いられている (Spiegler and Guevremont, 1993<sup>50</sup>; Fig. 2 参照)。

しかしながら、Fig. 1(b') の図式でも Skinner の行動分析の枠組みを十分には表していない。なぜなら、Skinner (1953<sup>42</sup>) は従属変数としての反応率に対する独立変数として、刺激の他に

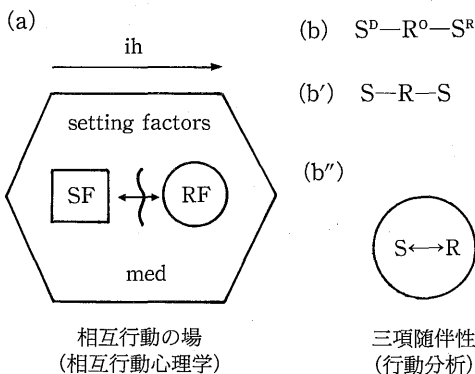


Fig. 1 行動の分析の枠組み

(a)はKantor and Smith (1975), p. 34より改変。  
(b)と(b'')はMorris (1992) より転記。

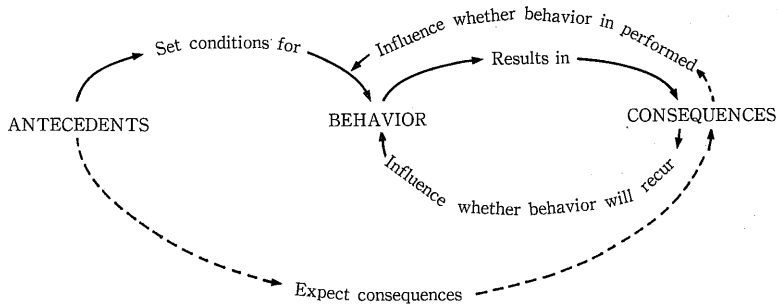


Fig. 2 行動分析的行動療法のモデル  
(Spiegler and Guevremont, 1993, p. 37より転記)

遮断化 (deprivation) と飽和化 (satiation) という動因操作 (drive operations) 及び情動操作 (emotional operations) も挙げているからである。その他にも、強化スケジュールの効果を指摘している (Skinner, 1969<sup>43</sup>)。これらの変数は、Skinner (1931<sup>40</sup>) 自身が初期の文献で指摘していた第3の変数 (third variables) に含まれるものである。さらに、Sは単一の刺激とは限らず、多くは事象 (events) である (Epstein, 1982<sup>7</sup>)。行動変容を図る際には独立変数としてのこれらの要因を当然考慮に入れるべきであり、そのためには図式もこれらの要因を含む形に変えるべきであろう。

このような観点から、Morris (1992) は Skinner が明示的に記述したことと従来十分には記述されてこなかったことを検討し、Skinner の三項随伴性を発展させ、Fig. 1(b'') のような図式で表している。この図式では Fig. 1(b') と比較して、後続刺激が省略されているが、それは強化操作、罰操作、消去操作を刺激と反応の関係を規定する文脈要因と考え、外枠の○に含まれる要素としているからである。すなわち、この図式は、「環境のある刺激とそれに対する生活体の反応との関係」を分析の中心においたとき、その関係を規定するのはそれを取り巻く文脈であることを意味している。従って、この場合の文脈要因には、強化操作、罰操作、消去操作だけでなく、当該の刺激と反応の関係生起に時間的にかなり先立って生じる動因操作、情動操作、強化スケジュールの要因が含まれ、さらには後

述のVIIで指摘するような種々の要因が含まれることになる。

このように Skinner の三項随伴性を発展的に理解すると、そこには文脈的視座が含まれていることが明らかになる。しかし、従来一般に理解されている Fig. 1(b') の図式のように考えると、そこには機械的な考え方が浮かび上がり、Hayes and Hayes (1992<sup>9</sup>) が指摘するように、Skinner には機械論的発想と文脈的な発想の両方が混在しているといえる。

行動療法家がこうした機械論的な視点をとるか文脈的な視点をとるかによって、臨床的アプローチに異なった発想がもたらされると考えられる。Bellack and Hersen (1985<sup>11</sup>) は、テキストに記載されている行動療法と比べ、実際の臨床場面で行われている行動療法はもっと複雑であり、様々な要因が関係しており、指導経過も客観的に記述しにくいことが多いことを指摘している。もし、従来のような機械論的な視点をとるのであれば、文脈要因の多くのものが考慮に入れられず、臨床場面で実際に生じていることが十分記述されないままになってしまうのではないかと懸念される。当該の刺激と反応に関連して臨床場面で生じている様々な要因を考慮の中に加え、クライアントの行動変化との関連性を検討していくためには、文脈的な視点をとることが必要であると考えられる。

#### IV. 刺激機能・反応機能と刺激クラス・反応クラス

相互行動心理学では機能の獲得という観点から刺激を発生的に捉える。すなわち、人が生活している環境内に存在する物や他の人は、当初刺激機能を持たない単なる物であり心理学的状況の外にあるが、それが人との相互作用で様々な機能を獲得し刺激物に発展していくのである<sup>#1)</sup> (Pronko, 1980<sup>31)</sup>, p. 20)。そして、人と物とのかかわりを通してさらなる刺激機能が付与されていく。また、刺激物の刺激機能は人によって異なるし、一つとは限らないし、状況によって同じ刺激物が異なる刺激機能を持つことが多い。すなわち、刺激物とその人のかかわりや、その時々状況によって刺激機能が異なるのである。

反応についても刺激の場合と同様、心理学的に重要なのは反応の形というよりもその機能である。刺激機能と同様、反応の形は同じでもその反応機能が異なる場合が往々にある<sup>#2)</sup>。どちらの機能を持つかは後述するその場の状況要因や相互行動の歴史による。逆に、反応の形は異なっても機能が同じ場合がある<sup>#3)</sup>。

このような反応機能と刺激機能の考え方は、両者が相互依存的なものであることを意味しており、両者が区別されるのは相互行動のうちで刺激の側を強調するか反応の側を強調するかによってである (Smith, 1984<sup>45)</sup>)。刺激機能も反応機能もそれ単独では記述できないものであり、相互行動の場に存在する他の要因との関係によって記述される (Morris, 1982<sup>23)</sup>)。すなわち、刺激機能と反応機能は相互行動の場において規定されるものである。

一方、行動分析の概念のうち相互行動心理学の刺激機能に対応するのは刺激クラスであり、反応機能に対応するのは反応クラス (オペラント) である (Morris, 1982<sup>23)</sup>)。刺激クラスはある反応群と機能的な関係を持つある刺激群と定義され、反応クラスは後続するある刺激群と機能的な関係を持つ反応群と定義される。このことは刺激クラスと反応クラスが相互規定的であ

ることを意味している。しかも、ある反応クラスを他の反応クラスと区別するのはその反応の形 (反応トポグラフィ) ではなく、三項随伴性や動因操作など反応生起に関連した諸要因によって規定される<sup>#4)</sup> (Skinner, 1969<sup>43)</sup>, p. 130)。反応クラスや刺激クラスは、両者が相互規定的であり、しかも反応生起に関連した諸要因 (本稿でいう文脈要因) によって規定されるという点で、相互行動心理学の刺激機能と反応機能の概念ときわめて近似したものであるといえる。

このように、刺激機能・反応機能も刺激クラス・反応クラスも、刺激や反応の形のみでは規定されず、それが生起している文脈の中で規定されているのであり、ここにも文脈的な視座を見ることができる。

#### V. 相互行動の歴史と強化の歴史

相互行動心理学では相互行動を時間軸上で変化していくものとして捉える。相互行動は常に展開 (evolution) していくものであり、ある相互行動が生起する背景にはそれまでの生活体と環境との歴史がある。当該の相互行動を説明する際にも、相互行動の歴史を分析に加えることになる。この歴史を通して刺激と反応は様々な機能を獲得していく。刺激機能と反応機能のまとまりが相互行動であるので、その歴史を考える際にも、反応の側と刺激の側の機能という双方の歴史を考えなければならない (といっても、相補的であるが)。Kantor は反応側の歴史として「反応の成立ち (reactional biography)」、刺激側の歴史として「刺激展開 (stimulus evolution)」を区別している (Kantor and Smith, 1975<sup>14)</sup>, p. 59-60)。

Skinner も同様な歴史的概念として、強化の歴史 (reinforcement history) を考えている (Morris, 1982<sup>23)</sup>)。すなわち、条件づけの操作 (強化の歴史) によってある刺激クラスは誘発刺激機能、弁別刺激機能を獲得し、ある反応クラスがある刺激の提示によって生起するように条件づけられるのである。Kantor の相互行動の歴史が生活体と環境との相互作用の歴史であ

るのに対し、Skinnerの強化の歴史は条件づけあるいは消去という操作の歴史を表しているという違いはある。

しかし、相互行動の歴史にせよ強化の歴史にせよ、どちらもある行動の生起に影響を及ぼす要因として概念的にも重視され、動物実験ではその機能の一つとして強化スケジュールの効果が実証されている (Johnson, Bickel, Higgins and Morris, 1991<sup>10)</sup>)。ただし、人間の日常生活の行動を対象としたとき、その行動の強化の歴史を十分に特定することも統制することも困難なことが多いと指摘されている (Wanchisen, 1990<sup>55)</sup>; Wanchisen and Tatham, 1991<sup>56)</sup>)。実際に、従来、行動療法においては、標的となる行動の形成の歴史について「行動分析」という項目を設けて記述がなされている。しかし、この行動分析は本稿で取り上げている学派としてのSkinnerの行動分析の意味ではなく、収集された様々な情報から「推測される行動形成の歴史」である。

現実には特定することが困難な場合が多いとはいえ、相互行動心理学においても行動分析においても、行動の分析には生活体と環境の相互作用の歴史あるいは強化の歴史という歴史的要因を含めて検討すべきであると考えられている。すなわち、当該の刺激と反応が生起している場面に時間的に先立つ歴史的要因の検討の際に考慮に入れなければならない。Morris (1992<sup>27)</sup>) は、後述するように、これらの歴史的要因も文脈要因の一つに挙げている。

## VI. 状況要因と情動操作・動因操作

相互行動心理学は刺激と反応を因果関係だけでは捉えず、様々な要因が関係していると考えられる。相互行動はいつもある状況下で生じており、生活体が直接行為を及ぼす刺激ではないが、その状況の中で特定の相互行動の生起に影響を及ぼすのが状況要因である (Kantor, 1959<sup>11)</sup>, p. 16)。状況要因はその所在によって大まかに3つのタイプに分けられている。①内的状況要因。生活体の側の要因である。例えば、空腹、満腹、

渇き、健康状態、疲労、嗜癖の有無、薬物、年齢などが挙げられる<sup>55)</sup>。②外的状況要因。行動が生起する場面に存在している環境側の要因である<sup>56)</sup>。③時間的状況要因。過去や未来の出来事も現在の相互行動に影響を及ぼす<sup>57)</sup>。

行動分析における近似した概念としては、前述したように動因操作 (遮断化と飽和化) と情動操作を挙げることができる (Morris, 1982<sup>23)</sup>)。その例として、佐藤 (1976<sup>36)</sup>, p. 101) は次のことを挙げている。強化刺激が水であれば、水を与えない操作が飽和化である。以前に水によって強化されたオペラントの自発頻度は水の遮断化によって増大し、飽和化によって減少する。また、苦痛刺激を提示するとその刺激から逃れようとするオペラントを自発するか周囲のものを攻撃するオペラントを自発する傾向が高まり、他のオペラントの自発頻度が低下する傾向をもたらす。このように、動因操作も情動操作も刺激ではないが、三項随伴性に影響を及ぼす状況的な要因であり、相互行動心理学の内的状況要因あるいは時間的状況要因に相当すると考えられる。

行動分析には、相互行動心理学の外的状況要因に相当する要因は特別にはない。というのは、行動が生起する場面に存在する多数の刺激が持つ機能については、一般に個々の刺激の機能を実証的に検討していくことによって、行動の生起に関連している刺激を見いだすことができると考えられているからである (例えば、Sasso, Reimers, Cooper, Wacker, Berg, Steege, Kelly and Allaire, 1992<sup>35)</sup>)。

## VII. 文脈要因

これまでの検討から、KantorとSkinnerの行動観に共通していることは、文脈の中で行動を捉えようとしていることである。Kantorは相互行動の場の諸要因との関係の中で行動を捉え、Skinnerは三項随伴性に加えて動因操作、強化スケジュールといった第3の変数との関係の中で行動を捉えようとしている。Hayes and Hayes (1992<sup>9)</sup>) はこのような行動観を「文脈の

中の行為 (act-in-context)」と表現している。さらに、Morris (1992<sup>27)</sup>) は行動の生起に影響を及ぼすものとして「文脈(context)」を専門用語として用いることを提唱しており、筆者はそれらの文脈的要因を包括する名称として「文脈要因 (contextual factors)」という用語が適当と考える。文脈要因は生活体が直接行為する対象ではないが、ある刺激と反応の関係性に影響を及ぼす要因であり、相互行動心理学の概念では、状況要因、相互行動の歴史、接触媒体 (例えば、物の色に反応するためには光が必須条件であり、暗い部屋では電灯のスイッチを押す行動に関係する) が文脈要因に含まれる。一方、行動分析の概念では、強化随伴性、動因操作、情動操作、強化の歴史、条件性弁別刺激、さらには最近取り上げられている確立化操作 (establishing operation) (McPherson and Osborne, 1988<sup>18)</sup>, Michael, 1982<sup>21)</sup>) や随伴性特定刺激 (contingency-specifying stimuli; ある刺激に弁別刺激機能を付加する陳述。例えば、「お客様が来られるのを見たら教室に入りなさい」と生徒に言うことは、到着するお客の姿に弁別刺激機能を付加する) (Schlinger and Blackely, 1987<sup>27)</sup>) などが該当する。

ここでもう一度 Fig. 1(b') を参照すると、外枠の○には、刺激と反応の関係を規定する文脈要因として、これらの様々な要因が意味されているのである。

### VIII. 弱点：実証的データ不足とボックス内行動分析

Kantor の相互行動心理学の最大の弱点は、実験領域でも応用領域でも実証的なデータがまだ極めて少ないことである。これは、前述のように相互行動論の立場に立つ研究者が少ないためであり、Kantor 自身が実証的な研究に携わることがなかったことも影響している。このような現状では、相互行動の場が持つ行動の分析のための概念的な強さはあっても、それを実際場面にもどのように適用するかは不明であり今後の課題である。まず、自然場面での行動を相互

行動の場の諸要因との関係で記述することから始めなければならない。

一方、Skinner の行動分析の最大の弱点は、基本概念がいわゆるスキナー・ボックスと呼ばれる統制された実験室内での行動分析から導き出されていることにある。すなわち、分析される行動が、人為的に統制された強化随伴性とオペラングラムに規定されているということである。日常の自然場面で生じている行動の分析に関する実証的なデータは少ない。あるとすれば、それは応用行動分析によるデータである。これから必要とされるデータは実験室内の実験行動分析のデータに加えて、自然場面での応用行動分析のデータである。それも Morris (1991<sup>20)</sup>) のいう行動の制御変数を発見しその変数を操作するという発見としての応用行動分析のデータが必要となる。そして、そこで効果が明らかにされた操作を Morris のいうデモンストレーションとしての応用行動分析に適用していくことが可能となる。

### IX. 行動分析的行動療法への示唆

行動分析的行動療法は、従来、Fig. 2 に示したモデルのように、三項随伴性に基づいて先行事象あるいは後続事象を操作する、すなわち随伴性を操作する (Skinner, 1988<sup>44)</sup>) ことによって行動を変容させることに取り組んできた。しかし、これまでの検討から明らかになったように、それに加えて文脈要因が行動の生起に様々な形で関係していることから指摘されることは、文脈要因を操作することによって行動変容を図るという手法も行動療法に組み入れられるべきであるということである。例えば、障害児と非障害児のかかわりを増やすために、遊び場の広さや遊具、保育者のかかわり方などが検討されている (Chandler, Fowler and Lubeck, 1992<sup>5)</sup>)。また、家庭でわが子に辛く当たる母親の行動を変容するために、家庭での行動変容に直接介入するのではなく、家庭以外の場面での母親の状況を変えることが有効であった (Wahler and Graves, 1983<sup>54)</sup>)。これらの手法は最終

的な標的行動に直接アプローチするのではなく、それを取り巻く文脈要因を操作したものである。

第二の示唆は、従来、般化の問題として訓練場面と日常生活場面のギャップが指摘されていたが、これは両場面での強化随伴性の差とともに、様々な文脈要因、特に状況要因を考慮に入れていなかったことによることが考えられる。状況要因が行動の生起に関係している場合には、クライアントの生活場面に行動療法家が出向いて行って指導したり、機会利用型指導法のように日常場面でクライアントにかかわっている人が行動療法に基づいた指導を行う方が有効であると考えられる（志賀, 1990<sup>39)</sup>; 園山・秋元・板垣・小林, 1989<sup>40)</sup>。

第三に、クリニックでクライアント自身へのアプローチ（刺激・反応機能の変容）を行なう場合には、クリニックの文脈要因と生活場面での文脈要因が大きく異なると般化が困難になるかもしれない。この場合、クリニックにおける状況要因を日常場面に近いものとしたり（渡部・山本・小林, 1990<sup>67)</sup>）、クライアントが生活する場面の随伴性や文脈要因の変容を図ることをも考慮に入れておくべきである。後者の場合には、日常場面でクライアントにかかわっている人（親や施設職員など）に対する指導が必要になる（岡田・井上・杉山, 1992<sup>29)</sup>。

第四の示唆はこれまでのものとは逆に、クライアントの反応と刺激との機能関係を強めることが考えられる。すなわち、生活場面の文脈要因の影響をあまり受けにくい程度に強めるのである。このことは特にクリニックで行動療法を実施する際に考慮すべきことであるといえる。

## X. おわりに

現在、心理学の領域では行動を文脈的に理解する立場が台頭しているように思われる（Cohen and Siegel, 1991<sup>6)</sup>; Schroeder, 1990<sup>38)</sup>）。Lichtenstein (1984<sup>15)</sup>) は現代の心理学が相互行動的な方向に進んでいるのは確かだが、その原動力が Kantor だけにあったとか彼

の直接的な影響によるものであるとはいえないと主張している。しかし、場全体が行動に関係しているという考え方は文脈的な理解をもたらすものである。本稿では、行動分析と相互行動心理学の基本概念を照らし合わせることによって、行動分析自体にも文脈的発想が生きていることが明らかになった。これまでの行動療法の発展に行動分析は大きな役割を果たした。それに加えて、相互行動的な視座を加えることによって行動療法のさらなる発展が期待できると考えられる。本稿では概念的な検討に限られたが、さらには行動分析の刺激性制御や多元的因果性 (multiple causation)、指導法についてのフリーオペラント法等も本論について関係深い問題と考えられ、それらを含めて実験的及び臨床的な検討を積み重ねることがこれからの課題である。

## 注

- 1) 例えば、子ねこを初めて目にした幼児は子ねこに触るかもしれない。そこで子ねこが幼児に咬みつき、手を引っ込めたとする。この場合、幼児にとって子ねこは接近し触るという刺激機能と手を出さないという刺激機能の二つを獲得した可能性がある (Kantor and Smith, 1975<sup>14)</sup>, p. 41)。
- 2) 例えば、石を拾い上げるという反応の形は同じでも、誰かにぶつけるために拾う場合もあり、その石が邪魔だから拾うという場合もある。
- 3) 例えば、筆算で足し算をするのと算盤や電卓で足し算をするのとでは、反応の形は異なっても合計が出るというその機能は全く同じである。
- 4) 佐藤 (1976<sup>30)</sup>, p. 107) は次のような例を挙げている。「同じ<手を洗う>のでも母親にしかられたくないために<手を洗う>のと、細菌に感染しないために<手を洗う>のとは、それぞれの場合に効果をもつ独立変数としての動因操作が違いますから、二つのオペラントということになります。」



- 5) 例えば、偏頭痛に悩まされている人はちょっとした音にも声を荒げるだろうが、頭痛のない日はその音は全く気にならないだろう。
- 6) 例えば、十円玉が落ちていても、誰かが見ていれば拾わないかもしれないが、近くに誰もいなければ素早く拾ってポケットに入れてしまうだろう。
- 7) 例えば、会社で上司に叱責された日には、自宅に帰って騒いでいる子ども達を怒鳴るかもしれないし、会社で上司に仕事ぶりを誉められた日は、子ども達が同じように騒いでいても気にも留めないであろう。
- 7) Epstein, R. (1982): Introduction. In R. Epstein and B. F. Skinner (Eds.) *Skinner for Classroom: Selected Papers*. Illinois: Research Press. pp. 1-7.
- 8) Hayes, S. C. (1978): Theory and thechnology in behavior therapy. *Behavior Analyst*, 1, 25-33.
- 9) Hayes, S. C. and Hayes, L. J. (1992): Some clinical implications of contextualistic behaviorism: The example of cognition. *Behavior Therapy*, 23, 225-249.
- 10) Johnson, L. M., Bickel, W. K., Higgins, S. T. and Morris, E. K. (1991): The effects of schedule history and opportunity for adjunctive responding on behavior during a fixed-interval schedule of reinforcement. *Journal of Experimental Analysis of Behavior*, 55, 313-322.

## 引用文献

- 1) Bellack, A. S. and Hersen, M. (1985): General considerations. In M. Hersen and A. S. Bellack (Eds.) *Handbook of Clinical Behavior Therapy with Adults*. New York: Plenum Press. pp. 3-19.
- 2) Bijou, S. W. and Baer, D. R. (1978): *Behavior Analysis of Child Development*. New Jersey: Prentice-Hall. pp. 31, 108-110.
- 3) Bijou, S. W. and Dunitz-Johnson, E. (1981): Interbehavior analysis of developmental retardation. *Psychological Record*, 31, 305-329.
- 4) Brown, W. H., Bryson-Brockmann, W. and Fox, J. J. (1986): The usefulness of Kantor's setting event concept for research on children's social behavior. *Child and Family Behavior Therapy*, 8, 2, 15-25.
- 5) Chandler, L. K., Fowler, S. A. and Lubeck, R. C. (1992): An analysis of the effects of multiple setting events on the social behavior of preschool children with special needs. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 25, 249-263.
- 6) Cohen, R. and Siegel, A. W. (Eds.) (1991): *Context and Development*. New Jersey: Lawrence Erlbaum.
- 11) Kantor, J. R. (1959): *Interbehavioral Psychology*. Ohio: Principia Press.
- 12) Kantor, J. R. (1970): An analysis of the experimental analysis of behavior (TEAB). *Journal of Experimental Analysis of Behavior*, 13, 101-108.
- 13) Kantor, J. R. (1978): Cognition as events and as psychic constructions. *Psychological Record*, 28, 329-342.
- 14) Kantor, J. R. and Smith, N. W. (1975): *The Science of Psychology: An Interbehavioral Survey*. Chicago: Principia Press.
- 15) Lichtenstein, P. E. (1984): Interbehaviorism in psychology and on the philosophy of science. *Psychological Record*, 34, 455-475.
- 16) Malagodi, E. F. (1986): On radicalizing behaviorism: A call for cultural analysis. *Behavior Analyst*, 9, 1-17.
- 17) Marr, M. J. (1984): Some reflections on Kantor's (1970) "An analysis of the experimental analysis of behavior (TEAB)". *Behavior Analyst*, 7, 189-196.
- 18) McPherson, A. and Osborne, J. F. (1988):

- Control of behavior by an establishing stimulus. *Journal of Experimental Analysis of Behavior*, 49, 213-227.
- 19) Midgley, B. D. and Morris, E. K. (1988): The integrated field: An alternative to the behavior-analytic conceptualization of behavior units. *Psychological Record*, 38, 483-500.
- 20) Michael, J. (1980): Flight from behavior analysis. *Behavior Analyst*, 3, 1-22.
- 21) Michael, J. (1982): Distinguishing between discriminative and motivational functions of stimuli. *Journal of Experimental Analysis of Behavior*, 37, 149-155.
- 22) 望月昭 (1988): 障害児 (者) 教育における行動分析的方法の意味. 上里一郎編「心身障害児の行動療育」. 同朋舎. pp. 20-41.
- 23) Morris, E. K. (1982): Some relationships between interbehavioral psychology and radical behaviorism. *Behaviorism*, 10, 187-216.
- 24) Morris, E. K. (1984): Interbehavioral psychology and radical behaviorism: Some similarities and differences. *Behavior Analyst*, 7, 197-204.
- 25) Morris, E. K. (1988): Contextualism: The world view of behavior analysis. *Journal of Experimental Child Psychology*, 46, 289-323.
- 26) Morris, E. K. (1991): Deconstructing "technological to a fault". *Journal of Applied Behavior Analysis*, 24, 411-416.
- 27) Morris, E. K. (1992): The aim, progress, and evolution of behavior analysis. *Behavior Analyst*, 15, 3-29.
- 28) Morris, E. K., Higgins, S. T. and Bickel, W. K. (1983): Contributions of J. R. Kantor to contemporary behaviorism. In N. W. Smith, P. T. Mountjoy and I. H. Ruben (Eds.) *Reassessment in Psychology: The Interbehavioral Alternative*. Lanham: University Press of America. pp. 51-89.
- 29) 岡田睦子・井上雅彦・杉山雅彦 (1992): 自閉児の排泄指導—母親指導による行動変容一. *日本行動療法学会第18回大会発表論文集*, 60-61.
- 30) Parrott, L. J. (1983): On the differences between Skinner's radical behaviorism and Kantor's interbehaviorism. *Revista Mexicana de Analisis de la Conducta*, 9, 95-115.
- 31) Pronko, N. H. (1980): Psychology from the Standpoint of an Interbehaviorist. California: Brooks/Cole.
- 32) Ribes, E. (1984): The relation between interbehaviorism and the experimental analysis of behavior: The search for a paradigm. *Psychological Record*, 34, 567-573.
- 33) Ruben, D. H. (1984): Major trends in interbehavioral psychology from articles published in the *Psychological Record* (1937-1983). *Psychological Record*, 34, 589-617.
- 34) Ruben, D. H. and Delprato, I. J. (Eds.) (1987): *New Ideas in Therapy: Introduction to an Interdisciplinary Approach*. New York: Greenwood Press.
- 35) Sasso, G. M., Reimers, T. M., Cooper, L. J., Wacker, D., Berg, W., Steege, M., Kelly, L. and Allaire, A. (1992): Use of descriptive and experimental analysis to identify the functional properties of aberrant behavior in school settings. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 25, 809-821.
- 36) 佐藤方哉 (1976): 行動理論への招待. 大修館.
- 37) Schlinger, H. and Blakely, R. (1987): Function-altering effects of contingency-specifying stimuli. *Behavior Analyst*, 10, 41-45.
- 38) Schroeder, S. T. (Ed.) (1990): *Ecobehavioral Analysis and Developmental Disabilities*. New York: Spinger-Verlag.
- 39) 志賀利一 (1990): 応用行動分析のもう一つの流れ—地域社会に根ざした教育法—. *特殊教育学研究*, 28, 1, 33-40.

- 40) Skinner, B. F. (1931): The concept of the reflex in the description of behavior. *Journal of Genetic Psychology*, 5, 427-458.
- 41) Skinner, B. F. (1950): Are theories of learning necessary? *Psychological Review*, 57, 193-216.
- 42) Skinner, B. F. (1953): *Science and Human Behavior*. New York: Free Press.
- 43) Skinner, B. F. (1969): *Contingencies of Reinforcement*. New Jersey: Prentice-Hall. 玉城政光監訳 (1976) 「行動工学の基礎理論」, 佑学社.
- 44) Skinner, B. F. (1988): The operant side of behavior therapy. *Journal of Behavior Therapy and Experimental Psychiatry*, 19, 171-179.
- 45) Smith, N. W. (1984): Fundamentals of inter-behavioral psychology. *Psychological Record*, 34, 479-494.
- 46) 園山繁樹 (1992a): 行動療法における Inter-behavioral Psychology パラダイムの有用性—刺激フェイディング法を用いた選択性緘黙の克服事例を通して—. *行動療法研究*, 18, 61-70.
- 47) 園山繁樹 (1992b): 相互行動的アプローチ: Jacob Robert Kantor の遺産. *中国短期大学紀要*, 23, 87-98.
- 48) 園山繁樹 (1993): 相互行動心理学の基本概念. *中国短期大学紀要*, 24, 127-137.
- 49) 園山繁樹・秋元久美江・板垣健太郎・小林重雄 (1989): 幼稚園における自閉性障害児のメインストーリーミング—機会利用型指導の試み—. *特殊教育学研究*, 26, 4, 21-32.
- 50) Spiegler, M. D. and Guevremont, D. C. (1993): *Contemporary Behavior Therapy*. 2nd eds., California: Brooks/Cole. p. 37.
- 51) Steinman, W. M. (1977): Generalized imitation and the setting event concept. In B. C. Etzel, J. M. LeBlanc and D. M. Baer (Eds.) *New Developments in Behavioral Research: Theory, Method, and Application*. New Jersey: Lawrence Erlbaum. pp. 103-109.
- 52) Twardosz, S. (1985): Setting events. In A. S. Bellack and M. Hersen (Eds.) *Dictionary of Behavior Therapy Techniques*. New York: Pergamon Press. pp. 200-201.
- 53) Wahler, R. G. and Fox, J. J. (1981): Setting events in applied behavior analysis: Toward a conceptual and methodological expansion. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 14, 327-338.
- 54) Wahler, R. G. and Graves, M. G. (1982): Setting events in social networks: Ally or enemy in child behavior therapy? *Behavior Therapy*, 14, 19-36.
- 55) Wanchisen, B. A. (1990): Forgetting the lessons of history. *Behavior Analyst*, 13, 31-37.
- 56) Wanchisen, B. A. and Tatham, T. A. (1991): Behavioral history: A promising challenge in explaining and controlling human operant behavior. *Behavior Analyst*, 14, 139-144.
- 57) 渡部匡隆・山本淳一・小林重雄 (1990): 発達障害児のサバイバルスキル訓練—買い物スキルの課題分析とその形成技法の検討—. *特殊教育学研究*, 28, 1, 21-31.

## **The Contextual Perspectives in Interbehavioral Psychology and Behavior Analysis : Some Implications for Evolution of Behavior Therapy**

**Shigeki SONOYAMA and Shigeo KOBAYASHI**

Some of basic concepts of J. R. Kantor's interbehavioral psychology and B. F. Skinner's behavior analysis are analyzed. The compatibility of the two system that have both contextual perspective and the usefulness of integrating them are acknowledged. It is suggested that contextual perspective might have implications for evolution of behavior therapy, such as (a) operating the contextual factors, (b) considering setting factors to promote generalization, (c) modifying the contingencies and contextual factors of client's daily situations, and (d) strengthening the functional relations between client's response functions and stimulus functions.

**Key words :** interbehavioral psychology, behavior analysis, contextual factors, behavior therapy